

▼持田季末子著『セザンヌの地質学』サンクト・ウィクトワール山への道』11・30刊、四六判二二二頁・本体一九〇〇円・青土社

あの山は火の山、あの石の塊は火なのだ

「気高く真実に満ちた絵画世界」へのあらたな挑戦

稲賀繁美



セザンヌの風景画を代表するサンクト・ウィクトワール山の連作については、これまで多くの著作や研究がなされてきた。本書は地学あるいは地質学という切り口に着眼し、徹底したひとつの統一的な読みを提案する。その際、内容の信憑性への疑義から、美術史家たちがあまり積極的に利用してこなかったジョワシャン・ガステの記録したセザンヌの言葉を前向きに導きとすることで、従来の限界を突破する。地学的な知識に関しては、セザンヌの友人たる古生物学、化学の専門家、マルセイユ大学教授となったフォルテユネ・マリオンとの関係に着目する。若き日のセザンヌの戯画的なスケッチには「白亜紀」や「マンモス時代」といったマリオン肉筆記載が残る。写実主義者セザンヌの地質学的構想力が問題となる。

この着想に導かれた著者は、レスタックの海景から丘の町ガルドンヌの風景に至る連作を精査し、中空に舞う移動視点や幾何学的構成による画面上の重層や抽象変形操作が、画家をして地層の重なりに密着し、それを執拗に分析する志向へと導いた過程を復元する。この経験はジベムイスの放棄された石切り場の連作において画面の構築性を高め、岩石と植物との共生や相互透へと画家の目を誘う。さらに著者は、折からの都市化現象にともない放棄された廃屋へのセザンヌの注視が、人間の時間と自然の悠久との溶解に至る様を犀利に分析する。就中シャトー・ノワールに残された石臼や貯水槽の残骸は、プッサンの《聖マタイ

と天使のいる風景》や《パトモス島の聖ヨハネのいる風景》の前景に散乱する大理石の建築資材を想起させる。これは評者もかねがね指摘していた論点で、著者の連想に共感を禁じえない。

こうして著者はプッサン後期の《マニエラ・マニフィカ》へのセザンヌの憧憬のありかを探り当てる。プッサンの風景に佇立する奇岩は、ひとつ目の巨人ポリュペーモスにも変身を遂げ、エトナ島の噴火を彷彿とさせる。大地の創生と終焉と。一見静謐に見える光景に隠された不穏な破綻。秩序の裡に潜む崩壊の手感と悲哀——。そしてプッサンの《我もまたアルカディアに》に漂う憂愁。そうした振幅を宿した神話的な「古典性」との交錯こそ、セザンヌが最晩年まで聖なる勝利の山へと接近しつつ掴み取るうとした大地の *energeia*、地霊 *genius loci* ではなくったか。ロジャリー・フライやローレンス・コナーウィング、マイヤー・シャピロら先学の箴言をも巧みに準用しつつ、著者はそうした仮説を、作品観察を通して積み上げる。

「宇宙の炭火のうそにある存在の煙」「陰影」が「凸面」をなして蒸散し流動化する」その「潤潤」と「大気の呼吸」。ガスからに遺したセザンヌのこうした言葉は、否応なく水墨山水画を想起させる。著者は安易な東洋趣味の連想は厳に慎んでいるが、今この瞬間に死滅し、かつ再生する世界（117頁）とは、唯識の示す「実相」であり、「遷り行く世界の一瞬」を観する誓い（187頁）は、道元が「正歩」にも通じはすまいか。ここで聊か煩瑣ながら、美術史的な補正を加えておきたい。モリス・ドニの《セザンヌ礼賛》に登場する老人はセザンヌ（172頁）でなくオディロン・ルドン。セザンヌの信憑性ある証言にプッサンへの言及はないと主張したセオドア・レフ若書きの論文（123頁）にはアンドレ・シャステルが「シャルル・カモンは……」と注文を付け、レフは弁解意見を *Revue de l'art* 誌に執筆している。さらにデカルト（130頁）ではないが、プッサンとその周辺にいた哲学者ピエール・ガッサンディとの理性の巧緻に関する親近性は T.J. クラークが『死の光景』で示唆しており、そのクラークはプッサン作《我もまたアルカディアに》に対するパノフスキーの分析（182頁）は、絵画作品を古代ヴェルギリウスの「挽歌」に埋め戻す還元論法であり、プッサン絵画の魅力はこの文学的トポスからの飛翔にこそあると切り返す（*StylZart*, No.1, 2007 拙稿）。ラテン語の古典詩にも造詣の深かったセザンヌが、このプッサンの傑作の背後に見える山容に畏怖を抱いたとするならば、故郷の山塊は挽歌をも突き抜けた地質学的次元を宿していたことになる。拙見ではそれはすでに若き日の《切通しのあるサンクト・ウィクトワール山》（187頁）に懸示されていたはずだ。鉄道切通の赤黒い傷の「挽歌」と相似形をなす崇高なる遙かな青い山容（19頁）。遠近両者の照応と流転には、画家の生涯を貫く自然探究と人間の遠巡とが十字交差 *crisscross* していたらう。「孤独な隠遁者」はその実、古代イオニア自然学の思索にも通じた哲人、思索の画家だった——。

著者のこの認識は、さらなる探究へと、なお開かれている。（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）